

平成15年11月26日

## 大さん橋国際客船ターミナルについて

生活環境学科講師 田村圭介

童謡「赤い靴」の舞台がここ大さん橋であるということは、私がこのプロジェクトに関わらない限り知る由も無かったであろう。

大さん橋は、1894年（明治27年）の完成以来、日本国の海の玄関として、国際貿易や文化交流の窓口として大きな役割を果たしてきた。完成後100年ほど過ぎ、老朽化したためと、将来の大クルーズ時代を見越して、大さん橋とともに客船ターミナルの再整備を計画する。時はちょうどバブルが弾けた頃である。横浜港では「みなとみらい21」を始めとする港を市民の憩いの場へと変換するウォーターフロント整備が進んでいた。

海外から船客を迎え入れ、市民の日々の憩いの場ということで考えられた「庭港」というコンセプトのもとに、新しい客船ターミナルのために1994年に国際建築設計競技を実施した。世界41カ国、660作品の中から最優秀賞として選ばれたのは、ロンドンに事務所を持つFOAの作品であった。

2002年6月のサッカーワールドカップに合わせて中断していたプロジェクトは工事が始まる。これまでの建築には例のないデザインや構造のため、また建設工期が短かったため設計、施工には様々な検討、工夫が成された。

曲面を多用した柱の無い大空間を持つ特徴的な建築は、2002年11月の完成以来、ターミナルを訪れる船客から慕われ、市民に様々な使われ方をされながら親しまれ、国内はもとより海外からも注目を集めている。

平成15年11月26日

## 日本の気候とガラス建築外皮に用いられるガラス素材の利用形態に関する研究

生活環境学科助手 内田敦子

透明な素材であるガラスを採用することによって室内空間は外部空間とつながり、光環境や熱環境に恵まれた明るく開放的で暖かな空間をつくることができる。しかし、季節や時間帯、方位によって、光や熱の量的コントロールを行わなければ眩しく、夏は暑すぎ、また冬は寒すぎるといった問題も生じる。本稿では、日本国内におけるガラス建築の外皮に用いられているガラス素材の利用形態について分析し、現在普及しているガラス建築の問題点を知るとともに、外皮素材としてのガラスの機能と日射遮へい、使用方位などとの組み合わせについて解析し、ガラス建築が将来益々発展することを目的としている。

調査方法は、過去に建築雑誌に掲載された、国内のガラス建築の中から計621件を選出し、これらの建物についてデータベースを作成し、設計事務所などに郵送して、調査内容の回答と確認をお願いした。このデータをもとに、まず、省エネ法断熱厚さ判断基準の気候区分に沿って、日本全国を5つの区分に分け、異なる気候条件のもとでのガラスの使用状況について、建物の完成年、建物の用途、使用されるガラスの種類、方位、ガラスの使用諸室、日射遮へいの有無などについて調査し、単純集計を行った。また、方位別壁面積とガラス面積の比について明らかにし、これらの要素を関連づけ、クロス集計の手法を用い、気候区分やガラスの種類、取付け方位、日射遮へいなどとの相関について解析を行い、その結果以下のことが明らかとなった。

- 1) 東京・大阪などの大都市を中心とした区分4に集中している。
- 2) ガラスが使われている主な場所はエントランスなどのオープンスペースや、事務室などである。
- 3) ガラスの種類は、地域による特徴的な違いはそれほどみられず、全国的に、単板のフロートガラスの使用が多く見られたが、機能性をもつ複層ガラスなどの使用も増加している。
- 4) 日射遮へいは、全体の1/3の事例で設けていないことが判った。
- 5) ガラスの使用されている方位は、東・西・南・北面はほぼ同程度であるが、北側の北東・北西面と南側の南東・南西面を比較すると、南側が20%程度多く使用されていることが判った。

このように、ガラス建築は、光環境、熱環境と日射遮へいが三位一体となった建物であることが明らかとなった。環境計画をする上で、この3つの要素について調整することが必要である。

平成16年1月21日

韓国の日本語教育への歩み ― 現況と今後の展望をめぐって ―

生活文化学科講師 李 淑 炫

韓国は世界で最も日本語教育が盛んな国と言える。国際交流基金の『日本語教育機関調査1998』によると、韓国の日本語教育機関における学習者は95万人に達し、世界の45%を占めている。1973年よりフランス語、ドイツ語、スペイン語、日本語、中国語、ロシア語、2002年からはアラビア語など第2外国語が必修科目になっている韓国の高校では、8割の高校生が日本語を履修している。1997年には76万人を上回り、全高校生の31%を占め、第2外国語を選択した学生数からみると45%に上る。2003年には約56万人（全高校生の32%）で第2外国語を履修した学生数の63%に達する。

1961年「韓国外国語大学校」に日本語科が初めて開設されて以来、1999年現在2年制・4年制大学合わせて151大学、214学科にある大学の日本語の科目は減る傾向にある。2002年ワールドカップサッカーを境に韓国では中国語がブームになり、徐々に中国語のクラスが増え始め、日本語クラスは多少減少している。「韓国外国語大学校」の場合、専門科目である日本語は1999年12クラスから2003年現在20クラスで微増ではあるが、中国語は1999年4クラスから2003年現在15クラスと増える傾向である。

しかし、2004年1月1日の日本文化全面解禁に伴い、2001年より中学校では第2外国語選択科目として取り入れられ、中高生日本語学習は増えつつあり、今後の日本語学習者の変化や中学生や大学生を含めた上級日本語学習者のための日本語教育が注目される。

平成16年2月18日

『最後の晩餐』の椅子はどんな椅子だったのか ― 映画・絵画にみるインテリア ―

生活機構学研究科生活機構学専攻教授 光 藤 俊 夫

本学に於ける最終講義として、イエス・キリストの「最後の晩餐」に用いられた椅子について考証した。

イエスの言行録としての「新約聖書」の記述、紀元前後を挟む時代の歴史的遺産、文献、あまたの絵画そして現代映画の演出にみられる、「最後の晩餐」の光景をスライドで概観、バーナード・ルドフスキー（『さあ横になって食べよう』多田道太郎監修・奥野卓司訳 1999）の忘れられた生活様式の研究を軸に、古代ギリシャ・ローマ、ビザンチン期の遺物にみられるトリクリニウム（三方に寝椅子を配した古代ギリシャ・ローマにおける食堂）について検証し、実際の「最後の晩餐」に用いられたと考えられる椅子、クリーネ（寝椅子）の形態を推定した。

ユダヤの「過ぎ越しの祝日」の訓令には、左側の身を寝かせて食事をする事が記され、それが古代貴族の食事の慣習であったことが述べられている。これはイエスの時代の前後数世紀の間も、中・上流階級の食事の習慣として行われ、文献にも壁画・絵画にも明らかである。我々に馴染み深い、サンタ・マリア・デルレ・グラーツィエ修道院食堂壁画として描かれた、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」の構図は、13人が片側一列に腰掛け、横並びの食事風景である。この不自然なレイアウトは、食堂のために画家のあえて意図したものであろうと推定される。

絵画ではニコラ・プーサン描くトリクリニウムでの「最後の晩餐」が、映画では『最後の誘惑』（マーチン・スコセッシ監督 1988）での光景が出色である。